

宮城谷昌光

*Miyagitani
Masamitsu
Moshōkum*

子血當君

ふしむつしん

2

講談社

宮城谷昌光

Miyagichi
Masamitsu
Masoboku

丁重君

もういっしょ

2

もうしやうくん
孟嘗君 2 (全5巻)

1995年9月25日 第1刷発行

著者 宮城谷昌光
みやぎ たにまさみつ

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二二／郵便番号一―二一〇一
電話 文芸図書第一出版部(〇三) 五三九五―三五〇四

書籍第一販売部(〇三) 五三九五―三六二一

書籍製作部(〇三) 五三九五―三六一五

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

定価はカバーに表示してあります。

宮城谷昌光(みやぎ たに・まさみつ)
1991年、『夏姫春秋』(海越出版社
刊・講談社文庫)により、第16回直木賞
受賞。人となりを伝えるエッセイ集は
『春秋の色』(講談社刊)がある。

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じ
られています。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料
小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第一出版部
あてに願います。

©Masamitsu Miyagitani 1995, Printed in Japan

ISBN4-06-206653-X (文1)

孟嘗君 2 • 目次

東西南北

7

尸子（しし）

56

大改革

106

脱
出

謎
の
花
館

乱
流

254

202

155

孟嘗君もうしょうくん

2

東西南北

風洪ふうこうは自分の家のなかにはいった。

一年間、この家は無人であつた。が、どこにもほこりはつもつておらず、まるでさきほど拭ふき掃除がなされたようだがすがしきであつた。

風洪は戸口から首だけをだして、そこに立つている隻真せきしんに、
「なんの用だつたかな」

と、いった。隻真はまじめな性格であるらしく、まっすぐ立つたまま、

「先夜、たいそうな風雨でした。この家の戸がはずれ、風雨がなかに吹きこんでいるのがわかりましたので、今日、わたしがなかにはいり、掃除をいたし、戸もおきました。つまり、なかにはいりましたのはわたしでして、盗人などではない、といったかったです」

と、兵卒が上官に報告するような口調でいった。

「そうか」

風洪は齒をみせ、

「それはありがたかった。礼をしたいが、そのまえに手伝ってくれぬか」と、いい、馬車をゆびさした。

「はあ……」

不得要領ふとくようりょうのまま隻真は馬車のほうへ歩いていった。日が落ちたせいで、馬の背が青くみえる。風洪は隻真のかたわらをすぎ、馬車にのぼると、

「この箱を家まではこんでくれ」

と、上からいった。

隻真は腕をさしだした。箱はずしりと重く、あやうく落としそうになった。

「重いですね。なにがはいっているのです」

「金だよ」

と、風洪はこともなげにいった。

「ええっ——」

隻真は目をみはって箱をみた。それから風洪をみあげた。

「それ、全部……」

隻真の喉にことばがからまった。車中におなじ大きさの箱が十数個はあろう。

「金だよ。これだけあれば、二十年はなにもしないで暮らせる。どうだ、盗んでみるか」

「とんでもない」

なまつばをのみこんだ隻真はあわてて箱をはこびはじめた。

魏の豪商である鄭両から借りた金にくわえて、大梁の齊巨の肆に寄つてうけとった礼金がある。ふつうに暮らしていけば、たしかに二十年は、その金だけで生きていけよう。

馬車の荷をすべて家のなかにうつしおえると、風洪は隻真の肩をたたき、

「汗をかかせたな」

と、いつて、自宅に招き入れた。

隻真はからだをかたくしてすわった。このような大金をもっている男が常人であるはずがない。悪事をはたらいてかせいだ金であれば、この男は大悪人であるにちがいない。隻真はそういう目で風洪をみ、恐れをいだいた。

風洪は足を組んですわり、

「家を守ってくれたのだ、なにか礼をしたいが、みやげらしいものはなにひとつない。金をうけとっていただこうか」

と、いった。隻真は膝をずらしてさがり、

「そんなつもりで、家を整頓したのではないのです」
と、ことわった。本心からそういつているらしい。

——正直な青年だな。

風洪は隻真の性根をみさだめたつもりであつた。

「隻真さん、あなたの顔に、この大金はいぶかしい、と書かれている。ちがうか」

「そうです」

「くわしい話をあなたにしてもはじまらないが、この金はきれいなもので、出処もあきらかだ。鄭両という魏の商人と斉巨さいこというこの都の商人からでている。たしかめてもらつてもよい」

風洪がそういうと、隻真はほつとしたようにうなずいた。

「さて、あなたの顔にはほかのことも書かれている。臨淄りんしで学問をしている。ちがうか」

「そうです」

すこしずつ隻真の表情がゆるんできた。

「先生はどなただ」

「田駢でんぺんとおっしゃるかたです」

この名も風洪にとっては初耳であった。もつとも風洪が学問に興味をいだいたのは最近であるから、田駢が以前から臨淄にいても、気がつかなかったであろう。

「なにを教える人か」

「道です」

と、隻真はあつさりいった。

——道のいうべきは、常の道にあらず。

と、いったのは老子らうしである。もしも人が「道とはこういうものだ」といったとすれば、それ

は不変の道ではない。老子の思想書はそういう逆説からはじまっている。田駢でんぺんは老子の思想のながれのなかにいる人であろう。ちなみに、そのながれのひとつは、のちに呪術じゆじゆつや神仙思想などをふくんで「道教」という宗教を形成した。

道、ときかされた風洪は、道とはなにか、と問いかえそうとしてやめた。隻真のきまじめさから、説明が長くなりそうだとおもったからである。

「田駢先生は、太子にお仕えしているのです」

と、隻真はつけくわえた。

仕えるといつても、正式に臣下になったわけではなく、学問の師として太子の宮室に出入りしているということである。

太子、ときかされた風洪は、田駢にたいする興味をうしなった。

斉君せいぎんの嫡子である因斉いんせいは、風洪の妹の風麗ふうれいや侍女の翡媛ひえんを死にいたらしめるほどの咎とがをくわえ、斉から放逐ほうちやくした本人ではないか。その性格は酷薄こくはくである、と風洪はみている。

——そんな太子に、なにが道か。

風洪は鼻先で嗤わらいたくなった。

太子因斉に道を説く田駢という学者は、顕揚欲けんやうよくのかたまりであろう。風洪がそう想像したのもむりはない。

田駢という思想家の事績はさだかではない。

思想としては没我の形態をとっていたのであろうが、実生活は富み、あまたの弟子をもって

いたともおもわれる。

こういう話がある。

齊のある男が田駢に目通りをゆるされた。その男はさつそく、

「先生は高義の人であるとうかがっております。先生は官途におつきになつておられないが、わたしを召使いとしてお使いいただけまいか」

と、たのんだ。

「どこで、わしのことをきいてきたのかね」

と、田駢は問うた。するとその男は、

「隣人の娘から、きいてまいりました」

と、珍妙なことをいった。

「どういふことなのかね」

と、田駢がかさねて問うた。男はその問いをまっていたように目を輝かしてこたえた。

「隣人の娘はとついだことがなくても、三十歳で七人の子がおります。嫁入りせぬのに、嫁入りのことは充分に承知しているようなものです。それと同様に、先生は官途におつきになつていないのに、その暮らしは千鍾^{しやう}、召使いは百人とのこと。すなわち富のことは充分に承知なすつておられると拝察いたしました」

それをきいた田駢はいやな顔をしてこの男をしりぞけたという。

鍾というのは、量の最高単位であり、一鍾はいまの約四九・七リットルをいうが、こまかな

換算はさておき、千鍾といえは莫大な俸祿ほうりくということであり、田駢てんぺんの生活よりは貴族とおなじであつたということであらう。

「さて」

と、風洪は金のはいつている箱に手をかけてから、顔を隻真のほうにもどし、

「礼をうけとつてもらえないらしいから、こちらのたのみをきいてもらえまいか」

と、いつて、微笑した。

「わしも学問をする」

と、風洪はいった。先生もきまつてゐる。尸佼しこうといい、魯の国の出身であるが、いまのすまいは衛えいの濮陽ぼくやうであるらしい。その先生をさがし、さらに秦しんへつれてゆき、そこで教しやうえを乞こうことになる。すくなくとも三年は秦にとどまることになる。そのあいだ、ふたたびこの家は無人になる。人の住まぬ家はいたみもはやい。

「そこでどうだろうか。この家に住んでくれぬか」

と、風洪は隻真にもちかけた。

隻真は隣家の部屋を借りてゐるという。当然、金を払つてゐるのであらう。が、この家に住んでくれれば、金をとらぬ、と風洪はいった。

隻真はふしぎそうに風洪をみた。わかつたやうでわからぬ話である。尸佼という学者について学問するのであれば、衛ですればよく、なぜ秦へゆくのであらう。それに目のまえの大金はなんのためにあるのか。

「うますぎる話だとおもっているのであろう」

風洪は微笑をたやさない。

「ええ、まあ……」

「うますぎる話には乗るな、と教えられたか」

「それもありますが、だいいち、あなたの姓名さえ知らないのです」

「おお——」

名乗ったつもりでいた風洪は大笑いした。それにつられるように隻真は小さく笑った。

「風洪という。処士だ。むろん斉人で、父は大夫だった。妹がいる。妹は秦へ嫁入りした」

「ああ、それで、秦へ——」

ひとつ、わかった、という顔の隻真である。

「ほかに、ききたいことは」

「大金のことです」

「これか……」

風洪の顔色から明るい色が消えた。わずかに考えたが、すぐに決心し、

「これは、わしの好きな娼女を身受けするための金だ」

と、うちあげた。今夜、その交渉にゆく。うまくいっても、その女とここで暮らすつもりはないので、やはり隻真に住んでもらいたい、今夜に引越してきてもかまわない、と風洪は胸のうちをみせるようないいかたをした。